

2020

令和2年4月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻320号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

4

とまろお



さわやか福祉財団

2020年9月29日(火)・30日(水)
「いきがい・助け合いサミット in 愛知」
開催延期のお知らせ

この度、9月29日(火)、30日(水)に愛知県名古屋市中区にて開催を予定しておりました「いきがい・助け合いサミット in 愛知」は、新型コロナウイルス感染拡大の収束見通しが立たない状況に鑑み、誠に残念ながら開催延期の決定をさせていただきました。



全国から3000人を超える皆様にお集まりいただく大会であり、また同じく全国にポスターの募集を呼びかけ、ご登壇の皆様にも事前ご準備など様々をお願いさせていただいたため、皆様のご負担とご迷惑を最小限にするために、募集呼びかけ前のこのタイミングで延期に踏み切ることといたしました。

楽しみにご予約いただいていた皆様には心よりお詫び申し上げます。

今回予定しておりました「いきがい・助け合いサミット in 愛知」での内容は、全体シンポジウム、分科会のテーマやご登壇者も含め、いずれも原則そのままに2021年9月1日(水)、2日(木)にパシフィコ横浜にて開催予定の「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」へスライドさせていただきます。

各テーマの内容をさらに深め、より充実した内容のサミットとなりますよう準備を進めてまいります。具体的な内容につきましては、本誌や当財団ホームページ等で順次ご紹介してまいりますので、ぜひ「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」へも引き続きご関心をいただき、ご参加いただけますよう、よろしく願い申し上げます。

さあ、言おう

2020年4月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

居場所のつながりをどうする？

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

ご近所同士で気兼ねなく ‘ちょっと困った’を助け合う

ちどり助け愛たい（岡山県倉敷市）

12 看取り・終末期を考える 裏を見せ、表を見せて…

閉ざされた人間の死と生

ペストと新型コロナウイルス 尾崎 雄

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・ 助け合いの地域づくり

16 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

23 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

25 さわやか活動日記（抄）

28 NEWS & にゅーす

⑩ さわやか豆知識

⑪ 『さあ、やろう』 vol.12のご紹介

⑫ 2020年度 実施事業・プロジェクトの紹介

⑬ みんなの広場/投稿募集

⑭ さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内/表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 長谷川 真理子

居場所のつながりをどうする？

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

例年は桜便りがうれしいこの季節だが、今年は様相が一変した。世界中に新型コロナウイルスの猛威が広がり、日本でも感染拡大が深刻な状況になっている。本稿時点では、緊急事態宣言が出るぎりぎりの状態と報道されているが、いずれにしても簡単におさまる状況にはない。

社会的活動が制限される中でさまざまな問題が起きているが、助け合い活動や福祉の現場でいえば、今、高齢者が集まる居場所やデイサービスの多くが閉鎖・休業となっており、通って来られない皆さんの生活環境の悪化や心身機能の低下が懸念されている。訪問サービスに切り替えて対応している介護事業所もあるが、元々介護人材が不足しており十分な体制はほとんど取れていない。地域によっては少人数の集まりも自粛が要請されており、孤立や食事面など大いに不安がある。自粛が長引くとなると、居場所の活動もこの状況の中で何ができるかをより具体的に考えていく必要があるだろう。孤立による不安な気持ちや状況を改善するためにまずできることは、やはり安否確認・見守りだろう。若い世代ならSNSやメールが有効だが、今の高齢世代ではなかなか難しい。地域の居場所を運営している皆さんが、日頃通ってきている方々に定期的に電話をかけて近況を聞いたり、状況によっては手作りのお弁当を持って訪ねて行ったり、ということもある。大事なことは、そのときに、次は

またいつ電話する、訪ねるね、困った時はいつでも連絡してね、ということ伝えてあげることだ。日にちが具体的にあればその日に向かって希望を持って暮らすことができる。カレンダーに書ける予定を伝えること、そうした電話一本がいきがいになる。また、車で数人を家から連れて出て、〆青空移動居場所〆を行い、「こうして出かけるのも楽しいね」と、プラスのきっかけにもしている。状況が難しい地域もあるが、何ができるかと考えることで、少しでも前向きな気持ちを保ってほしい。

学校も休校となったり、外でも思う存分遊べる環境でない中で、たとえば、子どもたちと居場所の高齢者をつなぐ活動はどうだろうか。以前、当財団では、『おじいちゃんおばあちゃん元気かな…。』という手引書を作成したが、これは子どもと地域の高齢者との手紙による心の交流を図るもので、学校と地域の関係機関などが連携して取り組んでいく。手紙をもらった高齢者は返信や電話で、「うれしくて涙が出ます」「くり返し読んでいます」「孫ができたようです」など、生活の張りにつながっていく。高齢者だけでなく子どもの豊かな心の育みにもつながっている。こうした活動は、やがて手紙を本人たちが持参したり訪問するといった新たな出会いや、高齢者を学校の行事などに招くといった交流にも発展していく。人の交流が制限されている苦しい時ではあるが、新たな絆を育む時間、やがて新たな助け合いが生まれ、そして深化していった、そんな時間になることを願いたい。

ただし、運営する皆さんの側の現実問題として、長い自粛で参加費や会費収入が減り、固定費の家賃や光熱費の支払いに困っている状況が始めている。企業や経済活動の支援策が議論されているが、居場所や助け合い活動団体も大切な地域の基盤であり宝だ。総合事業や一般介護予防事業では家賃や光熱費も補助が可能であり、家賃なら減額や支払い先延べという方法もある。これまで対象としていなかった団体も含めて、行政はぜひ地域に目配りして必要な支援を検討し、広く伝えてほしい。

と広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



ご近所同士で気兼ねなく 「ちよつと困った」を助け合う

ちどり助け愛たい (岡山県倉敷市)

岡山県倉敷市における支え合いの活動事例を紹介する第2回は、水島地区の第2層協議体から生まれた「ちどり助け愛たい」です。同会では、普段の暮らしの中にある「ちよつとした困りごと」を、ご近所同士で支え合う小さな助け合い活動を実践。その取り組みから、住民が互いに気配り・心配りができる温かな地域づくりが進んでいます。

(取材・文/城石 真紀子)



始まりは
ちよつとした「困った」から

倉敷市の中南部に位置する水島地区。戦時中は国策により戦闘機工場が建設され、戦後は水島コンビナートの操業により大量の労働者が流入してきた

人口約9万人のまちだ。

「ちどり助け愛たい」は、倉敷市立第五福田小学校区の第2層協議体メンバーで、水島地区で活動する「NPO法人かけはし(かけはし)」が中心となり、千鳥町市営住宅の住民らに呼び掛けて一緒に立ち上げた有償ボランティア

アによる支え合いの仕組みである。

「かけはしは、倉敷医療生協ヘルパー養成講座の卒業生が介護保険制度で利用できない生活支援をと、2000年に結成した有償ヘルパーの会で、その後NPO法人となりました。利用料は1時間1000円。依頼内容は掃除や草取り、通所介助、見守り、ごみ出しなど、30分程度で終わるものから数時間要するものまでさまざまでした。そうしたことからもっと短時間で終わるような日常の「ちょっととした困りごと」は、地域の助け合いとしてできないだろうか。そう考えたのが、そもそも始まりでした」

こう語るのは、かけはし理事長の猶原眞弓さん。

そこで、まずは困りごとの内容やニーズを知るために、市社協や研究機関などと協働し、17年7月から約半年間かけて水島地区のサロンに集う60歳以上の人に「困りごとアンケート調査」

を実施。

1118人から有効回答を得て、ちよつとし

たことで困っている高齢者が多くいることがわかり、関係機関とも地域の課題を共有。その結果を踏まえて、18年度の倉敷市市民企画提案事業に申請。採用が決まり、第一歩を踏み出したのであった。

「事業を開始するにあたっては、市から洗い出しをしてモデル地区を提案してほしいとの話がありました。その候補として真っ先に頭に浮かんだのが、千鳥町市営住宅の人たちの取り組みです。この団地では以前から、入居者の「困った」を住民有志が支援していることを知っていたので、この助け合いを「仕組み」として成立させて、他地域の見本にしたいと考えたのです」



かけはし理事長の
猶原さん

第3層協議体を設置して 専任のコーディネーターも配置

千鳥町市営住宅は、戦前に戦闘機場の従業員寮として建てられ、戦後は市営住宅として整備された3棟150世帯が住む集合住宅だ。周辺の水島西千鳥町地区の高齢化率は39%で、介護認定率は41・5%（18年9月時点）。同住宅で愛育委員（健康ボランティア）を30年務め、中心となって入居者のお世話をしてきた目黒妙子さんによれば、住宅内での助け合いが始まったのは10年ほど前のこと。



千鳥町市営住宅

「この市営住宅は5階建てでエレベーターはなし。独居高齢者が多く、見守りが必要な人も多く入居しています。

そのため当時の自治会長が、『みんなで助け合わないといかん』と言って、自治会でマッサージチェアを購入したのをきっかけに、誰でも来れるように住宅内の集会所を、月曜日から土曜日の午後に開放。『按摩でもしながら話をすればいい』とみんなのたまり場をつくり、困ったことがあればすぐに相談できるようにしたんです」

その活動が知れ渡り、モデル地区としての協力依頼を受けたわけだが、これまで長きに渡って好意で行ってきた助け合いを有償ですることに抵抗はなかったの
だろうか。
「ええこ
とじゃし、
いいよ。
少しでも



82歳の今も元気で活躍する目黒さん

お金を払ったほうがしてもらおうも気がラクだろうと思ってね」と目黒さん。

こうして、お手伝いする側を「ちょっとと隊」、受ける側を「ありが隊」と名付け、年齢・性別関係なく、「暮らしの中でほんのちよっとした支え合い」をスローガンとして発足したちどり助け愛たい。立ち上げにあたっては、住宅の住民とかけはしが連携を取り、民生委員、愛育委員、町内会長、高齢者支援センター、社会福祉協議会も一緒に、18年4月から集会所を拠点として毎月会議を開き、どのような仕組みにするのか、話し合いを重ねた。
「料金設定は15分で150円。利用者との間で現金のやりとりをしないことがトラブルを防ぐことにつながるだろ



活動には回数券を導入

うと回数券を導入。裏には実施日とかけた時間、お手伝い内容とちよこつと隊員名を記入できる欄を設け、私が一括して管理。地域の助け合いの様子もこの券を通してわかる仕組みにしました」（竹島さん）。

また、実施にあたっては「ちよこつと隊養成講座」を開催。生活支援コーディネーター、高齢者支援センター長などを講師とし、



コーディネーターの竹島さん



養成講座の修了証書授与式

生活支援を行ううえでの基本や認知症の人への接し方などを学ぶとともに、実際の活動も見学し、4回の講座を修了した「ちょこっと隊」を中心に編成。高齢化が進む限界集落で助け合いを行う津山市加茂町知和のNPO法人「スマイルちわ」にも研修視察に行き、交流を深めたりもした。

支え合いの根底にあるのは
お互いさまの隣人愛

現在、ちどり助け愛たいに登録して

いるメンバーは、ちょこっと隊が18名、ありが隊が10名。利用者は月平均5〜8名で、活動範囲は千鳥町市営住宅を中心に、近隣地域からの依頼にも柔軟に対応している。依頼の相談やマッチングなどのコーディネーターは竹島さんが行っているが、「集会所にいつも人がいるし、顔見知りだから、相談に来たその場で、『じゃあ、〇〇さんに頼めばいい』と目黒さんがコーディネーターしてくれて、後から会議で『こんな依頼があった』と聞くことも。言わば、影のコーディネーターですね(笑)。それぐらい自然に活動が回っています」(竹島さん)。

困りごとの内容は実にさまざまだ。

例えば、住宅の3階に住んでいる独居のAさんは、自立していそうに見えるが脚が悪い。そこで、買物の運搬とごみ出しを依頼。「買い物には行きたい。自分の楽しみだから。でも重い荷物を持って階段を上がれないと。ご

み出しも要介護認定2以上でなければ対応してもらえないので、所定のところまで捨てに行っています。いずれ自分も手助けが必要になるときが来るだろうから、そのときまで皆さんに『ありがとう』と言われ、そのときがきたら素直に『ありがとう』と言える自分でありたいです」(ちょこっと隊・鈴木さん)

介護保険サービスを受けているBさんは、日曜日だけ見守りを依頼。「月曜日から土曜日までは、デイサービスとヘルパー、大阪に住む娘さんが来てやりくりされているんですが、日曜日だけはどうしても調整がつかないと。でも認知症もあるし、『お母さんを1人にしておくのは心配』と娘さん。それで上の階に住む私が朝晩2回、顔をのぞきに行くことにしました。その方

には若い頃、いろいろお世話になったので、いわば恩返しです」(ちょこっと隊・赤尾さん)

Bさんはその後、体調を崩して施設に入所したが、娘さんから「回数券を持っていてと安心」と言われ、実際、券を活用してこれまで使っていた手押し

のシルバーカーの処分を依頼。「クルマを運転できる私が粗大ごみ置き場まで捨てに行きました。いずれは助けられる側になるから、お互いさま。できることはさせてもらいたいと思っています」（ちよこつと隊・桃井さん）

目黒さんは、「お金をもらわずにやると、するほうはさほど思っていないけども、してもらうほうはやっぱり遠慮があったんかなと思いますね。少しでもお金を払うことで、気兼ねなく『てつどうて』と言ってくれるようになってよかったです。高い所の電球の傘掃除や換気扇掃除などの力仕事をやってくれる男性や、仕事が休みの日に手伝ってくれる若い人もいて、それぞれができることで協力してくれています」と話してくれました。

さまざまな交流を通して 地域に広がる「助け愛」

毎月の会議は、いわば「作戦会議」。支援の状況報告をしたり、気になる人がいたらどのように支援したらいいのかをみんなで意見を交換しながら、話し合う。「専門家も入っているのですが、必要ならば関係機関につないだり、かけはしと連携して対応することもあります」（竹島さん）。

大切に行っているのは、その人の思いや暮らしを尊重した助け合い。「家に来るのを嫌う人もいるから、道で会ったら『今日も元気であるなあ』とさりげなく見守り、でしゃばりすぎないようにしています」（目黒さん）と、普段から気にかけて、お互いを見守ることがスムーズな支援につながっている。また、その活動は市営住宅の外にも広がっている。児童の通学班の付き添い、公園の草取り・掃除など地域のボ

ランテイ
アにも積
極的に参
加。一昨
年の西日
本豪雨の
際は、す
ぐ裏の第
五福田小
学校に同
市真備町
の被災者
約250
人が避難
している



月1回の作戦会議はいつもにぎやか

と聞きつけると、「自分たちにも何かできることはないか」と申し出て、炊き出しの応援にも駆けつけた。

「それをきっかけにつながりが生まれ、集会所で子どもたちの『夏休み宿題応援企画』も始まりました。好評につき、一昨年に続いて昨年も地元の小中学生を

対象に実施され、子どもたちを通しての交流も広がっています」(竹島さん)

ボランティアとは本来、特別な誰かがするものではなく、困っていそうな人がいたら気にかけて、そしてさりげなく手を差し伸べるものではないだろうか。ちどり助け愛たいの皆さんはそれを実践し、積み重ねることによって「お互いさま」の気持ちで醸成され、暮らしやすい地域をつくり出してきた。さらに担い手側は人から頼られ、自分の価値を再構築できる大切な場にもなっているように感じた。

千鳥・福崎町内会長の林親宏さんは「この小さな助け合い活動が地



避難所の炊き出しにも協力



ちどり助け愛たいと関係者の皆さん

域にもっと広がっていけば、安心できる人はたくさんいるはず」と活動に期待を寄せる。少しずつでも歩みを進め、気軽に助けてほしいと言える、また気づくことのできる地域づくりを広げていってほしい。

水島西千鳥町とその周辺に住む高齢者・障がい者を対象に、日常でのちょっとした困りごとの助け合い活動を実践。支援する人を「ちょこっと隊」、支援を受ける人を「ありが隊」と名付け、ごみ出し、買い物、布団干し、掃除などを有償ボランティアで行っている。「ありが隊」が支援を依頼するには10枚綴りの回数券を購入する必要があり、利用料金は1枚につき150円/15分。支援終了後、その回数券を「ちょこっと隊」が受け取り、後日、回数券と引き換えに謝礼(1枚150円)を受け取る仕組みとなっている。受付時間は月曜日～金曜日の10～16時。

●連絡先 / 〒712-8025 岡山県倉敷市水島南春日町2-19
TEL 090-5266-9194

「つなぐ専門職」として、もっともっと地域のそばへ

倉敷市では、生活支援コーディネーターが住民や関係機関と一緒にあって、支え合いの地域づくりを推進しています。その取り組みについて、倉敷市社会福祉協議会職員で第1層生活支援コーディネーターの松岡武司さんにお聞きしました。

■ 3本柱で業務を推進

倉敷市では、2015年度から生活支援体制整備事業に着手。元気な高齢者にスポットを当て、その人たちが活躍できるような地域づくりを関係機関と進めていくことを目的に、10月に「高齢者活躍推進地域づくりネットワーク会議」（第1層協議体）が立ち上がり、翌16年4月には生活支援コーディネーターが社会福祉協議会に配置されて、私がその第1号となりました。配置1年目で右も左もわからない中、幸い、市保健福祉局参与に厚生労働省で新しい総合事業の制度設計をされた

方がいて、バックアップしていただく中で、3つの宿題をいただきました。

1つ目は、倉敷市では通いの場を核にして地域づくりを進めていきたい。そのために、地域の中でどういう居場所や社会参加の場があるのかを把握し、それをガイドブックにまとめる。2つ目は、地域づくりを進めていくためには支え合いが大事になってくる。その意識と心をつなぐために、支え合いのまちづくりフォーラムやサロン交流会を開催する。3つ目は、担い手と活躍の場をつなぐために、生活・介護支援サポーターなど担い手の養成講座を行う、というものでした。



第1層生活支援コーディネーターの松岡さん

おかげで具体的な目的を持って地域に入っていくことができ、住民の皆さんが取り組まれている通いの場を地域の宝物として把握。繰り返し訪れる中で顔も覚えてもらうことができ、芋づる式に地域の好事例を知るきっかけにもなりました。また、その意義を理解して多くの人に伝わるように見える化

したことで、「自分の住む地域にこんな居場所があるなら参加してみよう」「自分の周辺にはまだないので、居場所やサロンづくりを始めよう」といった意識付けにもつながりました。その結果、これまで十分把握できていなかった通いの場が市内に430か所あることが明らかに（16年時点）。その数は年々増加し、19年度の調査対象は700か所にまで増えています。

フォーラムの開催を通じては、生活支援コーディネーターの存在と役割を知ってもらうことができ、地域づくりに取り組み住民の方々の「作戦会議」に呼ばれる機会も増えています。担い手養成講座でも、これから何かを始めたいと思う人とスタートラインから関わることで、さまざまな支え合いの取り組みや活躍の場へとつないでいきます。生活支援コーディネーターは人と人、人と情報などをつなぐ専門職ですが、その前段階で、地域や関係機関

とつながる専門職になる必要があります。振り返ると、この3つの宿題はそのための大切なプロセスだったと感じています。

すべての人が役割を持って輝ける地域づくりを応援

現在、倉敷市の生活支援コーディネーターは5人体制となり、第1層、第2層の垣根なく地域を飛び回っています。そのモットーは、「お節介と安請け合いで元気な地域づくりをしつかり応援する」ことです。節度のある仲立ちをするのがお節介。安請け合いの「安」は安心の「安」でもあります。支え合いの地域づくりは住民の皆さんだけではうまく進まない部分もあるかと思えます。そこをフォローして後押しすれば、解決のヒントになることもあるので、そのためのお節介や安請け合いなら大歓迎でやっていきたいと思っています。

生活支援体制整備事業も6年目に入り、最近では、地域課題を把握してその地域に必要な生活支援サービスをみんな考えていこうという動きも活発になっていきます。第2層協議体の小学校区でも広すぎるから、団地やご近所同士などの狭い範囲でやろうという作戦会議も多々あります。そうした小地域の取り組みにも対応できる力をつけて、高齢者だけでなく障がい者や子どもも含めて、すべての人が役割を持って活躍できる地域づくりを、これからも全力で応援していきます。



元気な暮らしと地域づくりのヒントを掲載したガイドブックを毎年刊行

裏を見せ、表を見せて…

閉ざされた人間の死と生
ペストと新型コロナウイルス

尾崎 雄

新型コロナウイルス肺炎の患者第一号は昨年12月初旬、中国の武漢市で発見された。明くる1月23日、同市は外界から遮断される。2月24日付け朝日新聞は「1100万都市封鎖 武漢疲弊 逃げ場なし」と報じた。悪疫に追い詰められた都市はどうなるのか。克明に描いた小説が二つある。一つは「ロビンソン・クルーソー」の著者、ダニエル・デフォーが1772年に書き、もう一つはノーベル賞作家、アルベール・カミュが1947年に出版した。いずれも題名は「ペスト」。黒死病と呼ばれたペストは、中世ヨーロッパ人口の3分の1を奪ったという。

デフォーは、1694年にロンドンを襲

い10万人の命を奪ったペストの惨状を、当時の「死亡週報」とロンドン市の「布告」を基に記した。市は「すべての芝居」などを「雑踏を招くような催物」や「料亭、居酒屋、その他の飲食店における酒宴」をいっさい禁止。「家屋閉鎖令」によって「すべての感染家屋には二名の監視員」を配置、「いかなる者も出入りしないよう厳重に」封鎖した。

「家人のうちの健康者は、もし病人のそばを離れてよそにいくことさえできたら命は助かるかも」しれなかったが、「たくさん人間がこの悲惨な囚われの苦しみのなかにもだえながら死んでいった」。それは「個人のこうむる災厄を償って余りある公

益」を護るために「支払わねばならぬ代償」だったのである。社会防衛と人権のバランスをどうとるべきか？ 今回の新型コロナウイルス禍でもダイヤモンド・プリンセス号が突きつけた正解のない問いである。

17世紀のデフォーは在宅封鎖された患者・家族の悲惨さを後世に伝えるいっぽう、20世紀のカミュは北アフリカの都市を舞台に封鎖都市に封印された人間が、どう生き抜き、どのようにして死んでいったかを非情に描く。閉ざされた空間で獐猛な悪疫と戦う市民たちの姿からどんな寓意を読み取るか。それはともかく、限界状況に追いこめられた人間たちは、最後まで困難と向き合う者とそうでない者、そしてどちらでもない者に分れるのだ。

私は2001年9月11日、米国のホスピス・緩和ケアを視察する旅の途上、ニューヨークで同時多発テロに遭遇した。ハイジヤックされた旅客機が高層ビルに激突、3

000人が即死した直後、マンハッタン島と米本土を結ぶ橋はすべて閉鎖され、ダイヤモンド・プリンセス号の乗客のように足止めされた。次の攻撃を企んでいるかもしれないテロリストの影に怯えながら、祖国に運んでくれる飛行機の到着を何日も待ちわびたのである。

その仲間だった医師の一人は帰国すると生き方を変えた。勤務医を辞め、困った人に尽くそうと借金して開業に踏み切った。そしてまもなく、生命維持装置なしには生きて行けない難病のこどもたちの暮しを支えるためのデイケアを事実上、無償で始めたのである。彼は後に日本医師会の「赤いげ大賞」を受けたが、その医師ほど劇的な人生転換はしなかったものの、同じテロ体験によって自分の進むべき道を再確認した旅の仲間はずなくない。

「コロナ」の次は別の新型ウイルスか、大地震勃発か。真の試練はいつ来るか。

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

いきがい

ふれあい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・

ご寄付者の皆様のご紹介

さわやか活動日記(抄)

NEWS & にゅーす

2020年度

実施事業・プロジェクトの紹介





北から
南から

新地域支援事業・ 各地の動き

(2020年2月1日～29日)

- 全国各地で、
推進の支援をしています
- 活動の一部を紹介しています



住民に参加を呼び掛ける
(住民対象のフォーラム、勉強会等)

加須市 (埼玉県)

10日 / 加須市大利根地区の地域フォーラムが開催され、住民100名ほどが参加、当財団も協力した。地縁関係者を中心としたフォーラム実行委員会がこのフォーラムを計画・実行し、助け合いの大切さを理解してもらうことを狙いとした。生活支援コーディネーターの説明に続き、財団の基調講演。事例発表では、サロン主催者、有償ボランティア提供会員、地域でボランティアをしている元気な高齢者等が発表し、「大利根の助け合いを共に考えていきましょう」と呼び掛けた。その後、第2層協議体立ち上げ宣言が行われた。

(岡野)

金沢市 (石川県)

19日 / 「令和元年度地区社会福祉協議会 会長研修会」が金沢市、金沢市社協、金沢市地区社協会長部会の共催で

開催され、当財団も協力。市内54か所の地区社協の会長等を対象に、住民主体の福祉活動推進に向け、各地区での住民懇談会開催のきっかけとして、助け合いの意義や具体的な手法を伝える講義を財団から行った。

(高橋)

新上五島町 (長崎県)

9日 / 新上五島町で助け合い創出勉強会があり80名ほどが参加、当財団はアドバイザーとして協力した。

町担当課長のあいさつに続き、第1層生活支援コーディネーターの浦田紀文氏からこの勉強会の狙いとこれまでの取り組みを説明。基調講演は「有償ボランティアから常設型居場所づくりへ」として熊本県合志市のNPO法人「ぽっかぽかすずかけ理事長の佐藤昭男氏が行った。その後、当財団から有償ボランティアと常設型共生型の居場所の意義を伝え質疑応答とした。資金や勉強会など意欲的な質問も出された。その後のグループワークは各地域に分かれ、第2層生活支援コーディネーター

1の進行で意見交換を行い、全体で共有した。
(鶴山)

鹿屋市(鹿兒島県)

12日/有償ボランティアや移動支援を進めてきた鹿屋市で、次の重点として常設型共生型居場所を取り上げることとなり、スタートとしてのセミナーが開催されて当財団が基調講演を行った。

行政のあいさつと、寸劇による生活支援コーディネーターの取り組み紹介に続き、財団から、いつでも誰でも型居場所の意義と効果、運営のコツや事例を通して居場所は助け合う地域づくりへの一番の近道であることなどを説明した。その後のグループワーク「あなたの行きたい場所は？」では、行きたい居場所を皆で出し合い、議論し、そこでできることを話し合った。ほとんどのグループが空き家を活用した週2回以上開催する居場所、どの居場所も特徴があり、九州厚生局の山内強課長とともにコメントした。このセミナーがきっかけとなり、地域で居

場所づくりも始まりそうな機運が高まった。
(鶴山)

生活支援コーディネーター・協議体と連携

美里町(埼玉県)

27日/第1層協議体が開催され、生活支援体制整備事業の説明で当財団が協力し、助け合いのある地域や、そのような地域を創出するための協議体による話し合いのイメージを持つてもらった。また、事務局から町の現状と今後の事業の進め方について説明があった。今後、モデル地域から勉強会を開催し、旧村単位で第2層協議体を設置して、助け合いの創出を目指していく。

寄居町(埼玉県)

6日/寄居町の第1層・第2層協議体合同研修会が開催された。全圏域で第2層協議体が設置されて1年、圏域ごとに進められてきた取り組みを第1層・第2層で共有しようと企画されたも

ので、約80名が参加、当財団も協力の。第1層からはモデル地区での移動販売の取り組みや今後の課題について、第2層からは各圏域のこれまでの活動について報告された。全体での情報交換によって、新たな気づきやモチベーションアップにつながったようだ。

ヨンアップにつながったようだ。

ヨンアップにつながったようだ。

長野市(長野県)

10日/長野市更北地区での第2層協議体(更北支え合いネット)の活動報告会に当財団も参加。更北支え合いネットでは現在、定期的に活動通信を発信しながら住民周知を重ねている。今回は活動創出に向けた具体的な手法について、他地区の事例等を参考にしながら協議し、各種の住民懇談会開催を検討していくこととなった。
(岡野)

東三河広域連合(愛知県)

20日/東三河広域連合では、構成自治体の関係者が集まって生活支援体制整備事業の情報共有を行っている。19年度はすでに9月に1度実施。第2回目

として今回はその後の進捗などを含め、状況を共有しながら今後の展開について意見交換し、当財団として制度の振り返りなどを含めた情報提供で協力した。本事業では進捗に応じてさまざまな展開があり、他の自治体の取り組みなどは大きなヒントとなる。広域連合単位でこうした企画が実施されることは、現場の担当者の視点においても、本事業の推進に大きな力になると感じる。

(長瀬)

いなべ市(三重県)

17日/「みんなで支え合う地域づくり基本講座」が、いなべ市社協主催で開催された。本講座は、いなべ市で設置する旧町単位4圏域での第1・5層(第2層は自治会単位118地区)の活性化を図るために全3回講座として実施されているもの。

今回は最終回の3回目。前回までは助け合い体験ゲーム等を盛り込みながら、各参加者が助け合いの意義を実感する内容となっており、今回は、それ

らの活動を地域で具現化するための協議体の役割と具体的な活動を当財団から説明しながら、グループワークを行った。

(高橋)

村上市(新潟県)

17日/村上市で毎年行われている、第1層・第2層の生活支援コーディネーターと協議体、行政(介護高齢課・自治振興課)が集まり全体の方向性を確認して、19年度の取り組みと20年度に向けた計画を共有し、学び合う目的の合同勉強会が開催された。当財団もアドバイザーとして依頼を受け、新潟県庁とともに参加。第2層各圏域の報告、第1層の報告、第1層生活支援コーディネーターの佐藤富喜子氏による20年度の取り組みについての発表があり、共有しながらさらに連携した取り組みが進む。体制ができて3年たった今、

まちづくり協議会等と連携して地域に仕掛ける動きが具体化されていることに加え、あらためて事業の狙いを確認し、生活支援の仕組みづくり、特に有

償ボランティアの仕掛けを念頭に動き出してはどうか、と提案した。(鶴山)

中予地方(愛媛県)

4日/愛媛県の中予地方で生活支援体制整備事業に係る連絡会が開催された。この企画は、この地域の自治体関係者が有志で実施しており、当財団も情報提供で毎回協力している。今回は伊予市、東温市、久万高原町、松前町が参加。事業の進捗や協議体の活動の様子などについて共有し、今後の進め方について意見交換した。

(長瀬)

須崎・幡多福祉保健所圏域(高知県)

5日/高知県須崎・幡多福祉保健所の合同企画で、生活支援体制整備事業の連絡会が開催され、当財団は情報提供で協力した。各保健所の圏域の自治体から行政や社協の担当者、生活支援コーディネーターを含めた関係者が参加し、事業の進捗と協議体の活動状況をグループワークで共有し、今後の進め方について意見を交わした。県の関係者も同席し、県レベルのバックアップ

体制としても重要な意味を持つ企画と
感じた。
(長瀬)

**協議体編成のための
研修会・勉強会等に協力**

加須市 (埼玉県)

20日／加須市北川辺地区の第2層協議
体設置に向けた大づかみ勉強会に住
民40名ほどが参加し、当財団も協
力。回挙がった地域課題を踏まえて、地
域に必要な活動とそれを創出するた
めに必要な人について、協議体
を想定して話し合ってもらった。

発表では積極的に手が挙がり、熱
気のある勉強会となった。同地区
では、フォーラムの際の実行委員
を中心に、勉強会参加者も運営委員
として参加する形で、第2層協議
体を発足する方針。
(岡野)

羽咋市 (石川県)

12日／羽咋市越路野地区で住民
勉強会が開催され、当財団が協
力。羽咋市では第2層協議体を
公民館圏域で編成し

ていきたいと考えて、各地区で協議
体編成に向けた勉強会を実施して
きているところ。全国の好事例や
グループワークで協議体の役割を
共有するとともに、アンケートで
協議体への参加意向を確
認している。今後は、参加意向
の住民を中心とした協議体発
足式を早めに行う予定。
(高橋)

敦賀市 (福井県)

4・18日／敦賀市西地区圏域
で第2層協議体設置を目的とした
「支え合い井戸端会議」が
開催され、当財団も協力。この
会議は合計3回予定されており、
4日が第2回、18日が第3回。
各回でグループワークを行って
きており、最終回となる第3回
では協議体への参加意向を
アンケートで聞き、手上げた
メンバーを中心に第2層協議
体を編成していく予定。
(高橋)

浅口市 (岡山県)

8日／浅口市で「第1回生活
支援を考える会」が開催され、
1月25日に開催された「地域
支え合いフォーラム」で

参加意向を示した人を中心に約
50名が集まった。今回は、第
2層協議体編成のきっかけとする
目的で、当財団から協議体の
役割や活動内容を伝え、グル
ープワークも行った。浅口市
では今後、旧町単位(3圏域)で
協議体設置に向けて住民勉強
会を重ねていく予定。
(高橋)

東彼杵町 (長崎県)

15日／3月にフォーラムを
予定している東彼杵町の第1層
協議体が開催され、当財団も
アドバイザーとして参加した。
フォーラムに向けたチラシが
完成し周知も始まっているが、
多くの人の参加を呼び掛ける
必要がある、と積極的な働き
掛けの意見交換がされた。ま
た、フォーラムに参加した人
たちをどうに生かしていくか
についても議論した。町を良
くしていくという住民の熱い
思いを、行政や生活支援コー
ディネーターらも実感する時
間となった。
(鶴山)

生活支援コーディネーター 養成研修等に協力

群馬県

18日／群馬県で生活支援コーディネーターフォローアップ研修が行われ、当財団も協力。同県では、推進会議として県レベルのバックアップ体制を継続している。今回の研修もこの会議で協議を重ねて行われ、県内の生活支援コーディネーターだけでなく、行政や社協など関係者も対象として参加した。生活支援体制整備事業の実践的な内容を主眼に県内の事例を共有し、グループワークを実施。今後の展開について検討した。

岐阜県

17日／岐阜県の生活支援コーディネーターフォローアップ研修が開催され、当財団も協力した。この研修では、県内自治体の生活支援コーディネーターだけでなく、共に生活支援体制整備事業を進める行政や社協などの関係者も

対象に位置付けている。午前中は、制度説明の時間を設けて本事業の基礎を再確認し、午後に実践的な情報共有と検討を行った。

限られた時間の中、それぞれの立場で必要な情報が得られるように構成され、参加者は積極的な意見交換を行っていた。

福井県

5日／「令和元年度生活支援コーディネーター養成全体研修会」が福井県立図書館多目的ホールで開催された。19（令和元）年度2回目の全体研修会で、今回は、生活支援コーディネーターのスキルアップを目的にできるだけ具体的な活動方法を伝えた。県による取り組み状況と方針説明に続き、南アルプス市の取り組み事例を第1層生活支援コーディネーター齊藤節子氏から報告

続いて、県内の大野市の取り組み事例について担当課および第2層生活支援コーディネーターの発表があった。当財団からは、活動創出に向けた3*ステ

ップの説明と段階ごとのグループワークを行った。

助け合いの地域づくりのために協力

多摩市（東京都）

17日／多摩市老人クラブの講演会が開催され、同クラブ役員約70名が参加した。当財団の堀田力会長が講演し、「令和時代における老人クラブ活動のありかた」として、令和時代の老人クラブの役割は、①従来の会員同士で趣味を楽しむ活動を続けること、②老人クラブは、生活支援コーディネーターや協議体とつながり、地域の各種助け合い活動とネットを組んで、従来行ってきた友愛訪問活動を続けること、または友愛活動に代えて、③同クラブは生活支援コーディネーターや協議体とつながり、クラブ全員が地域の生活支援の助け合い活動に参加するよう道をつけること、④同クラブは会員（特に男性会員）が地域の生活支援の助け合い活動に参加しやすいよう男性料理教

室などの研修を実施するとともに②または③の活動に参加した会員の活動発表会を開くなど激励に努めること、等が考えられると話した。さらに、会員に対して社協のサロン等の居場所に参加してはどうか、と勧めた。(編集部)

広島市(広島県)

19日/広島市安芸教区保護司会設立20周年講演会が開催され、同市の保護司の方々など約100名が参加、当財団の堀田会長が講演した。「居場所で生まれるふれあい・いきがい」をテーマに、刑余者の能力を引き出し、刑余者が自らを生かして暮らすのを多様な関係者が連携して伴走、支援する時代であること、また、保護司は本人の生き方全体を支援、伴走する認識を確立する必要があるので、そのために、司法関係の更生保護という縦割りではなく、厚生関係の福祉と一体で支援活動してほしいと話した。(編集部)

(本稿は、岡野貴代、高橋望、
堀山芳子、長瀬純治)

情報紙

助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙

『さあ、やろう』vol.12

近日
発行!

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さあ、やろう』。新地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに、送料、バックナンバーとも無料でお送りしています。ぜひご活用ください。

【主な内容】

- ◆「いきがい助け合いサミット in 愛知」
開催延期のご報告と次回サミットに向けた取り組みについてのご紹介 など
- ◆特集 座談会
「市民後見人による後見活動と生活支援活動はどう連携するのが望ましいか」
- 堀田カコラム ほか

『さあ、やろう』をご希望の方は、広報までお問い合わせください。

→TEL (03) 5470-7751



Vol.10

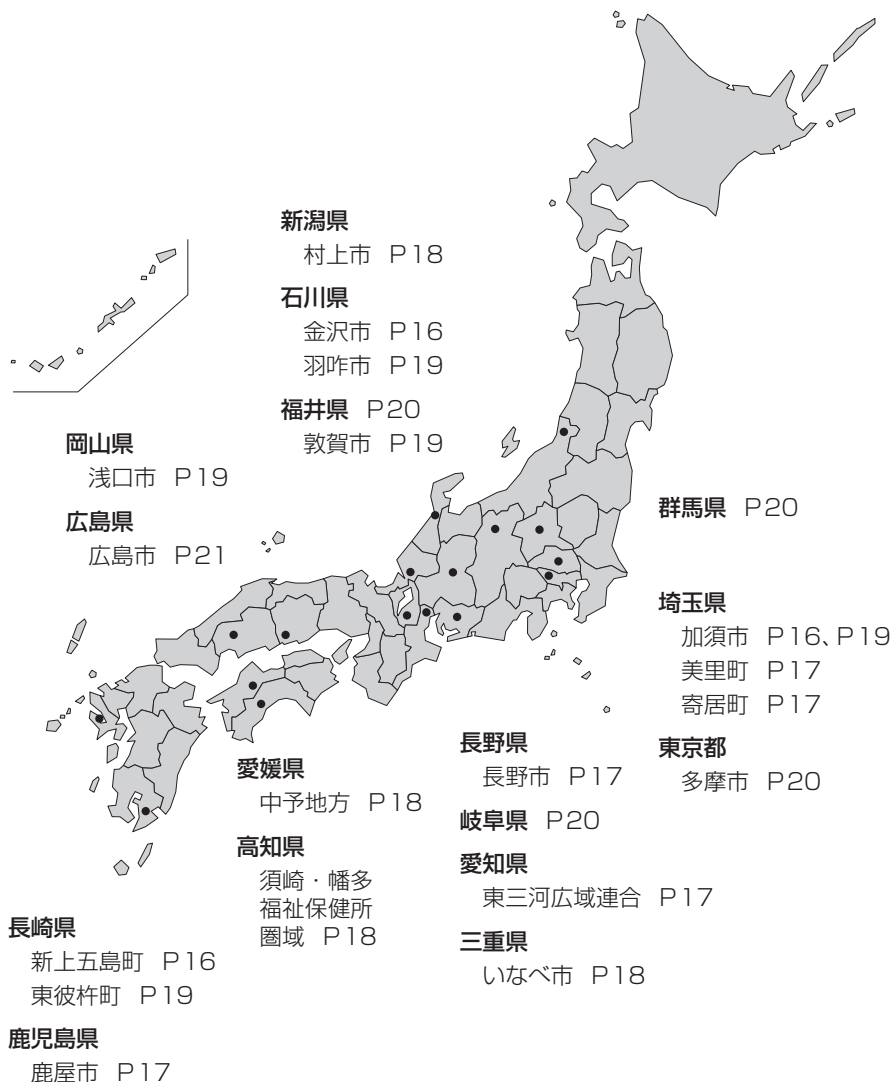


Vol.11

助け合いの地域づくり

新地域支援事業関係で今月号に掲載した地域を紹介します

「●」は今月号に掲載している地域、地域名の後のページ数は掲載ページです。
最初に★が付いている地域は、当財団と包括連携協定を締結。



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2020年2月1日～2月29日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日とずれが出て掲載時期がずれる場合があります。ご了承ください。

さわやかパートナー個人 (71件)

北海道	栃木県	石毛 英夫	原島 敏子	朝田 充	渡辺 浩一
寺上 洋子	菅野 忠雄	川口 清	松浦 隆史	大内 愛子	奈良県
丸藤 競	山田 智子	佐藤 悦子	丸山 哲史	古橋 和子	山出 哲史
宮城県	群馬県	原 幸雄	宮沢 邦子	愛知県	広島県
色摩 美津代	小山 範之	藤本 裕一郎	渡邊 一樹	加藤 さつき	黒田 不二男
山形県	埼玉県	藤本 裕一郎	赤松 高明	北畠 映子	島本 照久
高梨 英子	小野内 智子	増元 秀雄	近藤 栄子	関戸 進	福岡 亨二
福島県	川添 能夫	森田 剛	近藤 清晴	藤田 依子	山口県
須貝 一男	斎藤 敬基	東京都	菅原 敬子	三重県	追中 富美子
根本 良一	柴山 柁一	江本 晴行	鶴山 祐子	片山 幾代	徳島県
茨城県	中崎 朱美	小野島 一	芳賀 節臣	三宅 修司	麻野 信子
池ノ上 和夫	平野 方紹	木下 清	渡辺 政勝	滋賀県	愛媛県
橋口 栄彦	向所 ふみ代	木村 大哲	長野県	谷仙一郎	田中 徹
間中 節子	千葉県	仲田 明子	筒井 庸子	松浦 正和	佐賀県
山下 多鶴子	安斎 昌敏	野見山 國光	水沢 芳夫	大阪府	西田 京子
			静岡県	寺井 正治	
				安居 正	

さわやかパートナー法人 (14件)

NPO法人かたくりの会
 近畿労働金庫
 認定NPO法人ケア・ハンズ
 NPO法人COCO湘南
 有限会社さわやか金沢
 NPO法人さわやか北摂
 一般財団法人住友生命福祉文化財団
 公益社団法人
 生命保険ファイナンシャルアドバイザー協会
 NPO法人地域サポートの会さわやか高知
 株式会社植屋
 株式会社日立物流
 マクセルホールディングス株式会社
 社会福祉法人
 緑成会特別養護老人ホーム緑の郷
 NPO法人隣の会

一般ご寄付 (5件)

高田 富士雄 (3万円)

トラベル・スタンダード・ジャパン株式会社
(5万円)

直居 幸藏 (2万円)

西田 清吉 (3千円)

ボランティア・ベンダー協会
(16万1864円)



私たちと一緒に、「新しいふれあい社会」をつくりませんか？

さわか福社財団は 皆様のご支援によって活動しています

さわかパートナー (賛助会員) として、
ぜひご支援ください。

個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、
どなたでもお申し込みいただけます。
また、税制優遇措置もあります。

◎詳しくは、最後のページをご参照ください。



さわやか活動日記(抄)

〈2020年2月1日～2月29日〉



ふれあい推進事業

その他

これからの 高齢者の役割を 提言

〔2月10日〕

神奈川県厚木市で、神奈川県老人クラブ連合会の主催による「地域支援事業担い手養成研修シンポジウム」が開催され、当財団の堀田力会長が基調講演を行った。演題は「人生100年時代における

高齢者の任務」。会場

の厚木市保健福祉センターホールには、県内各地から約120名が参加した。講演では、老人クラブが時代に応じて役割が変化してきたこと、今は、地域の自治会などの他団体とも協力しつつ、ちょっとした助け合いからさらに一歩進んで家事援助などを担うことが求められており、これが高齢者のいきがいにもなることが強調された。

(丹)



〔2月14日〕

神奈川県横須賀市の総合福祉会館で、横須賀市老人クラブ連合会主催による「地域支援事業担い手養成研修」が開催され、丹が講師を務めた。神奈川県老人クラブ連合会を構成する県内6ブロックのうち、横三ブロックでの開催として、横須賀市、三浦市、逗子市、鎌倉市、葉山町などから約60名が参加した。横須賀市老人クラブ連合会会長の加藤春樹氏



社会参加推進事業

社会人地域参加推進プロジェクト

社会参加事業へ つなげるために

〔2月20日〕

東京・文京区の東京大学本郷キャンパス伊藤国際学術研究センターで開催された、認定NPO法人プラチナ・ギルドの会主催「第7回プラチナ・ギルドアワード」表彰式に参加した。同表彰式は、社会貢献活動を表彰する

による「シニアサークル安針台」の助け合い活動実践報告が注目を集めた。

(丹)

式典で、今回は特別賞1名を含む5名の方が表彰された。来賓あいさつで堀田力会長より、「ボランティア参加は最高のぜいたくであり、まさに表彰対象者はその実践者である」との話があった。表彰対象者はそれぞれ素晴らしい活動を各分野で実践しており、自身の母親の経験から認知証カフェを立ち上げられた方DV(家庭内暴力)から少女を助ける活動をしている方などは、ふれあい・助け合い社会の実現につながる事例でもあり、当財団の社会参加推進事業にもつなげたい。

(玉置)

〔2月21日〕

東京・千代田区の学

士会館（本館）で行われた、公益社団法人日本フィランソロピー協会主催の「第17回企業フィランソロピー大賞」贈呈式に参加した。企業フィランソロピー大賞は、企業のSDGsの視点から自社の経営資源を活用して活動し、社会課題の解決に貢献した企業を顕彰。

その企業モデルを示しながら活動の輪を広げ、本年は7企業が表彰された。大賞を受賞した第一勧業信用組合は、信用組合ならではの「人とコミュニティの金融」「育てる金融」「志の連携」という3つの基本方針を具現化することで地域の持続

的成長を支えており、大手金融機関ではできない、業種、業態を越えた地方創生、地域活性につながる活動が評価されたものであった。受賞された各企業は、それぞれ本業を越えた素晴らしい社会参加活動をしており、これらの当財団の社会参加推進事業へ発想をしっかりとつなげたい。

（玉置）

子ども育成支援プロジェクト

子育て応援団

事業報告会

【2月8日】

にっぽん子ども・子育て応援団は、201

5年から当財団の委託事業として「地域まるごとケア・プロジェクト」を実施しているが、19年度は「見えてきた！ 地域ぐるみで、みんなまるごとケアのヒント 市民発 ごちゃませ 真剣 まるごとケア」をテーマに東京・日比谷図書館コンベンションホールで報告会を実施した。

子育て支援・まちづくりりにシニア男性を呼び込む取り組みというテーマにふさわしい講師として、今回の基調講演は恵泉女学園大学学長でありNPO法人あい・ぼーとステーション代表理事でもある大日向雅美氏にお願いした。パネリストとし



て、北海道で孤立しがちな子育てを支援するNPO法人子育て応援団かざぐるま代表理事の山田智子氏、岐阜県で孤食児童も独居老人も参加できる「おとなも子どももOK食堂」を運営するNPO法人コ

ミュニティサポートスクエア理事長の杉浦陽之助氏、富山県の自宅の庭に誰も排除しない・されない居場所「みやの森カフェ」をオープンした一般社団法人Ponteとやま副代表理事の加藤愛理子氏

に登壇いただいた。

冒頭、当財団の清水肇子理事長が「改正介護保険法を踏まえて、住民主体の地域づくりを進める取り組みが全国で始まった15年は、国連でSDGsが採択された年でもある。誰一人取り残さない、支え、支え合うということが基本の考え。誰もが自分事として考え、皆で地域の仕組みをつくっていきましょう」と開会のあいさつを行った。

動と仕組みを中心に講演した。港区の子育てひろば「あい・ぽーと」で、地域の子育て・家庭支援に従事する人材を育成する「子育て・家庭支援者養成講座」を開講した当初の受講者は99%が女性であった。これは何か変わったと感じ、団塊世代の男性を取り込むために講座のサブタイトルを「現役時代の名刺で勝負！」と付けるなど工夫した。「企業人として、組織で培ってきた技術・経験を地域に生かしてほしい。ただし、肩書のことではありません」と説明した。講座修了者は、能力や特技を発揮し、皆さんから「まちプロ」と呼ば

れて親しまれている。

その後、各パネリストからの活動報告と質疑応答があり、前三鷹市長（東京都）で、につぼん子ども・子育て応援団の企画委員でもある清原慶子氏から「マジ」が大切と思う。自分事、自由、自立、自己実現、自己啓発、そして自治体の役割です」と開会のあいさつがあった。参加者は78名。アンケートには、タイトルにある「まるごと」の4文字に主旨が凝縮されている、などとあった。地域でこちゃませの可能性が見えてくる報告会となった。各地でますます取り組みが広がることを期待したい。（中島）

財団運営グループ

都立水元小合学園 より就業体験

〔2月12、14・17、18日〕

東京都立水元小合学園高等部2年生の生徒1名が5日間、当財団で就業体験を行った。

不慣れた環境の中、事務の補助作業全般、パソコンでの書類作成など、どの作業内容も丁寧に確実にを行い、苦手

に思うことにも取り組み、改善し、やり遂げた。作業を進めていく中で、期日のある作業内容について、その場で話し合っただけでもでき、とてもよい形で修了できたと思う。

（齋藤）



事務所より 事だ

●今年、東京では観測史上最も早く桜の開花が宣言された。新型コロナウイルスのせいですが、桜の開花から春の訪れを感じたことで少しはみんなの心にも春が訪れるかな？
こんなときこそ、みんなで助け、助けられる世の中でありたいですね！

NEWS

& にゅーす

2019 (令和元) 年度 「連合・愛のカンパ」 支援先が決まりました

立ち上げ支援プロジェクト

さわやか福祉財団では、日本労働組合総連合会（連合）より組合員の方々のカンパ（連合・愛のカンパ）を提供いただき、当財団の資金を加えて、地域のふれあい・

2019 (令和元) 年度「連合・愛のカンパ」助成37団体

- はっちゃんの家（青森県五所川原市）
- 石越協議体石越地区連絡会 いしこし助け合いサービス（宮城県登米市）
- としよ木漏れ日（秋田県大館市）
- きずなカフェ ふれあいの杜（栃木県宇都宮市）
- よつてきない！ 元気な農園（群馬県高崎市）
- えがおで仲間の共友隊（埼玉県北本市）
- UR東坂戸団地助け合いの会（埼玉県坂戸市）
- おまかせスマイルサポートの会北坂戸（埼玉県坂戸市）
- ワンコイン買い物ツアーふるさと会（買い物物支援隊）（埼玉県坂戸市）
- 一般社団法人つばきのわ（埼玉県所沢市）
- 花園子ども食堂運営委員会（埼玉県深谷市）
- まごころさぼーと（埼玉県本庄市）
- 『みんなの居場所づくり』準備委員会（東京都江東区）
- すまいるネット（東京都稲城市）
- コットン・コミュニティ・タウン（CCT）（神奈川県横浜市）
- 中野支えあい協議体（山梨県南アルプス市）
- SCわかなん みんなで助けあい隊（山梨県南アルプス市）
- 居場所「社カフェ・野バラ」（静岡県静岡市）

都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成
大阪	12	3	島根	1	1	福岡	2	1	沖縄	2	
兵庫	10	2	山口	1		佐賀	1	1	合計	108	37
奈良	1	1	徳島	2	2	大分	1				
和歌山	4	2	香川	1		長崎	2	1			

助け合い活動の団体立ち上げ、新規事業立ち上げを支援しました。

案内は昨年10月中旬に行い、募集期間を11月から12月15日までとしました。全国の社会福祉協議会、NPOセンター等にもホームページや広報誌への掲載など周知に協力いただいた結果、33都道府県108団体から応募があり、応募団体の割合は、居場所づくり27・8%、子ども支援18・5%、障がい者支援15・7%、助け合い活動13・9%、地域交流その他、となりました。

結果、下記の通り37団体に総額488万6700円を助成しました。各団体への助成金額の上限は15万円で、今後さまざまな活動に活用されます。

資金を提供していただきました連合組合員の皆様に、心より感謝申し上げます。

(内田 信幸)

- 旭が丘地区まちづくり協議会 旭お助け隊 (三重県鈴鹿市)
- Rera (レラ) (新潟県新潟市)
- ふれあいサポートささかみ (新潟県阿賀野市)
- ふれあいサポートすいばら (新潟県阿賀野市)
- 新潟県在宅保健師の会 佐渡支部 (新潟県佐渡市)
- ふれあい喫茶 菜の花 (大阪府平野区)
- NPO法人 泉大津市 和花 (大阪府泉大津市)
- NPO法人 ふれあい (大阪府寝屋川市)
- みんなの居場所 きらきらぼし (兵庫県神戸市)
- 一般社団法人さんでーかふえ (兵庫県神戸市)
- 有償ボランティア団体『いろりの和』あさくら (奈良県桜井市)
- 和歌山LOG友の会 (和歌山県和歌山市)
- 一般社団法人はしっ子えがおサポート (和歌山県橋本市)
- みんなわすけあいネット (鳥根県出雲市)
- 暮らしのサポートセンターみんなの家Asa居 (徳島県鳴門市)
- 暮らしのサポートセンター「縁どころ」 (徳島県鳴門市)
- おたがい様隊 (福岡県福津市)
- よかよかボランティア 集おう・三根 (佐賀県三養基郡みやき町)
- はこべらの里 (長崎県西彼杵郡時津町)

■都道府県別応募と助成状況 ●33都道府県 108団体の応募 ●助成団体 21都道府県 37団体

都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成
北海道	2		福島	2		千葉	2		静岡	3	1	新潟	4	4
青森	1	1	栃木	1	1	東京	7	2	岐阜	2		福井	3	
宮城	6	1	群馬	3	1	神奈川	7	1	愛知	4		滋賀	1	
秋田	1	1	埼玉	15	7	山梨	2	2	三重	1	1	京都	1	

さらに助け合いを 推進しよう！

「ブロック全国協働戦略会議の開催」

ブロックとの協働戦略プロジェクト

2月26日、さわやかインストラクターと助け合い推進パートナーを対象にブロック全国協働戦略会議を東京・両国のKFC HALLで開催しました。前日に予定していた全国交流フォーラムは、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止。戦略会議は次期介護保険制度の見直しにおける助け合い支援の動きをメインに、さらに助け合いをどう広げていくか知恵を出し合うことを目的に開催しました。体調に十分留意したうえで開催とし、参加は通常の3分の2ほど。マスクや手洗い、消毒など十分に留意する中で、前向きな議論が行われました。

2021（令和3）年からの介護保険制度の改正に向けて、国は議論を進めており、要介護者1、2の生活支援の地域

支援事業移行は見送りの方向ではありませんが、必要な見直しは行われます。その中で、今後の方針として、①要介護者の生活支援問題、②有償ボランティア支援策、③ケア・プラットフォームの形成

（厚生労働省 社会・援護局関係）を柱とし、堀田力会長が制度の経緯を説明し、議論を進行しました。ケアマネジャー等に助け合い活動の長所をどう説明するか、地域一貫ケアをどうつくるか等、現場での工夫や知恵を出し合いました。各地で生活支援コーディネーターが支援しながら有償ボランティアも立ち上がる中、各地の事例や広げ方についても共有しました。

午後からは、新地域支援事業におけるインストラクターの役割について改めて確認しました。介護保険制度が始まる前から有償ボランティアを実践し、推進してきたインストラクターは、今後、腕の見せどころでもあります。男性に生活支援の助け合いへの参加を促す方法ととも

に、生活支援コーディネーターをどう支援していくかを共有しました。

さらに、愛知サミットの意義等について清水肇子理事長より説明がありました。これらの情報を受けて、インストラクター

は各県ごとの次年度の取り組みについて計画し、助け合い推進パートナーは生活支援コーディネーターや自治体の視点で意見交換の時間を持ち、前向きで活発な意見交換となりました。

新地域支援事業が始まり5年が経過する中で、これからも住民主体による助け合いの地域づくりを強気に推進する生活支援コーディネーターらを、インストラクターと一緒に支援していきます。



（鶴山 芳子）

2020年度

※2020年3月24日現在の予定。

金額の数字は各事業の直接事業費予算額、1万円未満は省略しています。

実施事業・プロジェクトをご紹介します。

ふれあい推進事業

4億578万円

- ①生活支援コーディネーター・協議体支援プロジェクト
- ②ブロック等との協働戦略プロジェクト
- ③ふれあいの居場所推進プロジェクト
- ④立ち上げ支援プロジェクト
- ⑤復興支援プロジェクト

◆ 昨年度の取り組みの様子 ◆



住民フォーラム



住民ワークショップ



助け合い体験ゲーム

社会参加推進事業

3077万円

- ①社会人地域参加推進プロジェクト
- ②子ども育成支援プロジェクト
- ③スポーツふれあいプロジェクト
- ④民間支援創出プロジェクト

情報・調査事業

1億3192万円

- ①情報誌発行プロジェクト
- ②統括広報プロジェクト
- ③調査政策提言プロジェクト
- ④地域助け合い情報活用研究プロジェクト

収益事業

1732万円

- ①不動産賃貸等事業

みんなのひろ場



遺贈、具体的に
どうすれば？

匿名希望さん 69歳

埼玉県

「ご両親の持ち家、土地をどうしたらよいかと相談があります。福祉財団への遺贈という手段があるかわかり、とても良い情報です。具体的にどうするとよいのか、お知らせいただければ助かります。

(編集部より)

「ご投稿ありがとうございます。遺言書作成等については、具体的にはお住まいの地域の公証人役場でご相談が可能です。また、財団にもふれあい遺贈基金のパフレットがありますので、お気軽にご連絡ください。



認知症でも
貢献できると実感

石津 道弘さん 48歳

静岡県

私たち「憩の家みち」では、牧之原市で通常のデイサービスをしながらさまざまなボランティア、地域貢献活動を14年間頑張ってきました。難病患者さんの外出支援、車いすの無料貸し出し、引きこもりの人々の支援、小学生の下校時見守りなどで。また、「どうせなら飲んで忘れよう」と、お酒好きが集まる会、お笑いコンサートなど、小さな法人ですが地域の方々と協働しています。また、活動から、認知症で保護の必要がある方でも、見守りがあればまだまだ社会に貢献できると実感しています。



その実感を、あちこちで発信してください





『さあ、言おう』投稿募集

あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。

ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など



投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前ほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

送付先

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階 公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX (03) 5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります(所得税の寄付控除額の上限は所得の40%-2000円)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の専用用紙をご用意していますので申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵

はり絵・池田げんえい



「菜花蝶」

編集後記 ●新型コロナウイルスの影響で居場所の活動等も制限されている今、何ができるでしょうか。巻頭言で理事長が書いています(P2~)。●「活動の現場から」は、3月号に続き岡山県倉敷市。住民の力で育ててきた活動が、体制整備によってますます活性化、頼もしい存在となっています。生活支援コーディネーターの松岡さんにも活動について聞きました(P4~)。●2019年度「連合・愛のキャンパ」の助成先が決まりました(P28「NEWS&にゅーす」)。●当財団の20年度実施事業・プロジェクトが決まりました(P31)。

助け合いを
広げよう!



長谷川
眞理子

地下鉄の駅もJＲの駅も交差点も、

東京の街はどこでもいつでも、

スマホの画面を見ながら歩いている人たちがばかり。

他人どうしではあるけど、

人間はただの障害物ではないのにな。



- 総合研究大学院大学学長
青土社から「モノ申す人類学」という書物を出版しました。
自然人類学者として、現代社会の諸問題を論じています。

（おま） 4月号

通巻320号 2020年4月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
細馬一紀
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社
編集担当 塩瀬潔泉

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

いきがい・助け合いサミット in 大阪

『助け合い大全'19』

昨年9月に開催した「いきがい・助け合いサミット in 大阪」のすべてを収録した『助け合い大全'19』です。

サミットでの全体シンポジウムと各分科会における発言要旨をまとめた『パネル編』、ポスターセッション出展の全作品を掲載した『ポスター編』、そして『提言編』を3冊セットで頒布いたします。助け合い活動、“お互いさま”の共生社会づくりに、ぜひお役立てください！

お申し込みは当財団まで

→TEL (03) 5470-7751

1セット2,000円(税込み) 送料別途

※3冊セットのみでの頒布となります。

【助け合い大全'19 提言編 目次】

- いきがい・助け合いサミット in 大阪の意義と特徴
- 全体シンポジウム発言要旨
- 分科会1～54
提言／登壇者／議事要旨
- ポスター展
- いきがい・助け合いサミット in 大阪を振り返って



ポスター編



提言編



パネル編